
MONSTER HUNTER ~ 紅嵐絵巻 ~

Monster Hunters !

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MONSTER HUNTER ～紅嵐絵巻～

【Nコード】

N0796W

【作者名】

Monster Hunters!

【あらすじ】

個性派暴走メンバーの集い、つまりサークル『Monster Hunters!』のリレー小説！

執筆メンバーは

『キヨン』

『蒼崎れい』

『獅子乃 心』

『サザンクロス』

『 L O S T 』

の五人でお送りします！

舞台はMHP3rdでおなじみの“ユクモ村”！

個性派執筆メンバーの長編リレー作品、とくにご覧あれ！

第1話（著：キヨン）

世界とは、広いだろうか。

否、狭いだろうか。

それは、人それぞれにより感じ方は全く異なるのだ。同じような考えであろうと、それは似て非なることとなるのだ。

十人十色とはまさにこのことだろう。最も、“世界”という一つの括りにしてしまえば十人では済まない。何十億、何百億という“個性”が現れるのだ。

さて、冒頭に戻ろう。

世界は広いか否か。自分であれば、後者だ。

世界が狭いとはよく言ったものである。

物語は、そんな“世界”の中で始まる。

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツッ！！！！

満月の星が輝く夜。

一匹の狼が高らかに雄叫びを上げる。

その余りの大音量に草に止まっていた光蟲や雷光虫が光と共に飛

び立った。

月の光と小さな命が生み出す光が、その“狼”の姿を頭あいつわにする。

強靱な発達を遂げた荒々しく躍動する四肢。甲殻は鋭く立ち上がり、合間に見える鱗は鮮やかなライトブルーの光を反射する。頭部には一対の角。その下に構える狼の顔。

蒼天に轟く剛雷を模したその姿は、まごうことなき“雷狼竜”。

「ヤマト！ ランシエ！ ナデシコ！ 覚悟はオーケーだろうな？
！」

「勿論ですニヤ！」

「言われなくても最初から出来てるわよ！」

「問題ありませんニヤ」

“雷狼竜”は闇夜の中、四つの影を目にとめた。

二つ、否、二匹のアイル！。防具を着込み、その手には己の得物を一つ。

一人の女性は据わった瞳で弓を構えて。

もう一人の男は、背にある大きな刀、
“太刀”を引き抜き目の前の“雷狼竜”を見抜く。

「行くぞオツ！」

男の一声と共に、両者が一步踏み出す。

ここは、人とモンスターの暮らす弱肉強食の“世界”。
人は皆、この世界のことをこう呼ぶ。

“モンスターハンター”と

。

*
*
*
*
*

その村は、山の中腹辺りにあった。

周りを岩に囲まれた村は、モンスターの侵入を頑なに拒む、言わば 大袈裟に言えばだが 要塞。

最も目に付くのは、村の頂上にある大浴場。

六角形の屋根を四層に組み上げ、村の中で最も大きな建物は、村のシンボルマークとも言える、温泉マーク 炎のマークとも言えるが を称え、常に湯煙を上げていた。

村の名は、『ユクモ村』。

温泉に恵まれたこの村は、日々客足の途切れることを知らない。ハンター、商人、旅人……職業柄は様々だが、沢山の人々からこの村は愛されていた。

大浴場を一つ、南に降りた所の右手には、クエストボートがあり、少なからず依頼が数日に一度更新される。

クエストから帰ったハンター達は、ユクモ村の代名詞とも言える温泉で汗を流すのだ。

逆の左手には、村のハンター用の宿舎が設置されている。ランク分けはされていないが、皆平等な部屋となっており、武器等をしまえるボックスも常備され、かなり使い勝手は良いものだ。

その横手には、訓練所へ続く道がある。

駆け出しや、基礎復習に来るベテランハンターまで、様々なハンターが足を訪れる場所だ。

指導をする教官は、厳しい且生徒思い。わざわざこの教官の稽古を受けに来るだけの者もいたりする程だ。

ここの知名度も中々に高かったりもする。

それらの更に一段下。

右手には加工屋。

左手には雑貨屋がある。

加工屋の主人は竜人族の老人。

左手に、ドスフロギイの皮で加工された手腕袋を付け、いつもハンマー片手に仕事をする元気なおじいちゃんだ。

ユクモ村限定の武器を創作したりと、竜人族ならではの知識は健在で、日々武具と向き合う姿は加工屋の手本となるに違いない。

左手の雑貨屋では、ハンターの基本となる回復薬から書物まで、様々な物を常時取り扱う、ハンター必須の店だ。

その広場では、他の商人達も店を構えている。この辺りでは滅多に取れない虫等も売っているものだ。時々開かれる半額祭では、村中の人が集まることも暫しあるとかないとか。

その広場を西に抜けると、ユクモ農場と呼称される農場がある。

鉱石、魚類、キノコ……沢山のものを採取できる、緑溢れた所だ。

奥には、『ニヤンタークエスト』という物も設置されている。

これは、オトモアイルー達だけがクエストを受注し、狩場へ向かうという、ギルドでも最近可決されたものだ。

「オトモだけで狩猟させるのも良い修行だ」と、オトモアイルー達を出させるハンターも多いのだ。

村としての集落もきちんとあり、農場へ行く途中に右に右折すれば村人達の元気な姿を見られるのは間違いない。

「ぶつはあゝ！ やっぱ風呂上がりの一杯はこれに限るッ」

場所は村でも一番大きく高い位置にある大浴場に戻る。

腰にユクモ村特製の入浴用の履物『ユアミシリーズ』を着けた健康な茶褐色の肌の男　村雨^{ムラサメ}　翔はドリンク屋特製の『ミラクルミルク』を腰に手を当てぐいっと一杯煽った。温泉で火照った体に内側からミルクの冷たい感覚が広がる。これこそが、彼にとっての至福の一杯であるのだ。

「ご主人はいつも旨そうに飲みますニヤア」

彼の横では猫　獣人族のアイルーが翔と同じミルクを舐めるようにチビチビと飲んでいた。猫は上品に飲む、とよく言われるが、このアイルーの場合は“可愛く飲む”が妥当であろう。

「ヤマトお、風呂上がりつてのは豪快に一杯行かなきゃいけねえつつう掟があるんだぞッ」

「ニヤニヤッ!? ご主人、それは誠ですかニヤッ!?」

「俺は嘘を言わねえ！」

これは彼らの勝手な“掟”です。

「なあコウル！ お前もそう思うよな？」

「ですニヤ！」

ドリンク屋のアイルー　コウルに勝手なことを言う翔だが、コウル自身は迷うことなく頷く。

ドリンク屋の商売はおいしい商品を客に楽しんでもらうことにあり、いつも来てくれる翔には中々頭が上がらないのだ。

「さっ、てと。ヤマト、そろそろ行くぞ。今日はクエスト更新日だ」
「了解ですニャ！」

ミラクルミルクを飲み終えた一人と一匹はコウルにお礼を言っ
て大浴場を後にする。

翔はインナーの上に防具 『ユクモシリーズ』を身に纏う。
防具、というよりは民族衣装に近いかもしれない。和風のイメー
ジに固めた外見は赤や黄色に彩られていた。普通に村人達と比べて
も遜色は無い。それでいて守るべきところはきちんとカバーするの
が防具である。

現在は頭部は着けておらずに自分の家に置いてきている。武器も
同様にだ。

アイルーであるヤマトもオトモアイルー専用の防具を着込む。こ
れも翔の『ユクモシリーズ』と同じ物だ。

オトモアイルーとは即ち、クエストに“お供”^{オトモ}することから“オ
トモアイルー”と言われている。

ギルドの規定では最近になって一人で二匹までオトモアイルーの
動向が許可されるようになった。これによりハンター達は殆どがオ
トモアイルーを二匹連れて行くのを見掛けるようになったものだ。

しかし、翔の場合はオトモを増やしたりはせず、ヤマトとのコン
ビを崩さないでいた。

戦力の増強も良いかもしれないが、慣れないまま狩猟に行くのも

危険だし、まずそこまで危険な狩猟も無いだろうという意見だ。

大浴場を出て階段を南に下る。

頭上には紅葉の木があるが、まだ紅葉狩りに行くまでとは言えなさそうだ。

それでも近い日に行けるような雰囲気にはなり始めている。

ユクモ村と言えば“温泉”でもあり、“紅葉”でもある。繁殖期その内の秋となると紅葉が赤い色を付けて美しく舞い落ちるのだ。それを見にわざわざユクモ村へと観光に訪れる人も珍しくない。

その紅葉をいつも眺めている人物が一人。

和風の着物を着こなし、優雅に座りながら道行く人々に笑顔を振りまく女性。

「久御門村長」

翔が彼女に手を振ると向こうも柔らかい動きで返してくる。

翔が“クミカド村長”と言った通り、彼女こそがここ『ユクモ村』の村長、イチ久御門市である。

「翔様、お湯加減の方はいかがでございましたか？」

「最高つすよ。風呂上がりの一杯がそりやもう旨かった！」

美味しそうに飲むジェスチャーをする翔に市もコロコロと笑みをこぼす。

「そう言えば村長、クエストの更新ってされてるっすか？」

「いいえ、まだでございますよ。ですが今日中には新しいのが来ますでしょうから」

この村では大きな街のように毎日クエストが更新されることはなく、殆どが数日に一度の更新となっている。

クエスト、と言っても極稀に中型モンスターが出現する程度でそこまで害はなく、この村に一時滞在するハンター達によって難なく討伐されてきたので村は今のところ安全だ。

「そんじゃ、更新されたらまた来ます」

「お待ちしております」

最寄りのクエストが無いようなのでここは一旦後に。更新までしばらく時間を潰そうかと、翔は更に南へ下ってユクモ農場を目指した。

「ニヤ、カケル様にヤマト様ですかニヤ」

木でできた頑丈なつり橋を渡り終えるとそこからがユクモ農場だ。そのユクモ農場を一人一匹で管理するアイルー。名をセバスチャン。アイルーの中でもユクモ1優秀と言われている程で、ユクモ農場の管理をそつなくこなすエリートアイルーだ。

「うつすセバスチャン。収穫はどうだ？」

「可もなく不可もなく、と言ったところですニヤ」

でもまだこれからですニヤ、と先を期待するように言う。繁殖期ももう間近である。その時こそが収穫ピーク。期待が高まるのも無理は無い。

「ちょうどいいや。暇だからなんか手伝わせてくれよ。ヤマトもいるし」

「手伝わせていただきますニヤ！」

意気込み良くビシッと背伸びをするヤマト。「よろしくお願いしますニヤ」とセバスチャンもペコリと頭を下げてから作業を始めた。

「カケルは網の引き上げ。ヤマトはキノコの収穫をお願いしますニヤ」

「うっし、任せろッ」

「こっちも頑張るニヤ！」

「ミーは畑と蜂蜜のトコにいますニヤ。何かあつたら声をかけてほしいですニヤ」

「「応（ニヤ）ー！」「」

「んしょ、んしょ……、っと。おお！こりや結構じゃ大漁じゃねえか！カクサンデメキンにバクレツアロワナ……小金魚。古代魚。レアモンだなっ」

「……む。このキノコは……、パク。……ニャッ、マヒ、ダケ……ニャッ……」

「んお！ これは……、S A S I M I U O！ ……貰っていいだろうか……」

「……………（ビクッビクッ）」

「……お二人ともどうしたのですかニヤ……？」

「取り乱した（ニヤ）」

「さ、さいですかニヤ……」

一時的に暴走しかけた一人と一匹。偶々様子を見に来たセバスチヤンがなんとか事態を収拾させ、二人に別のことをするように指示を出した。

「何ッ！？ 俺は釣りがしたいぞッ」

「僕はなんでも大丈夫ですニヤ！」

「ハア……もう好きにして良いですニヤよ……」

ユクモ農場管理猫セバスチャン。実はユクモ村1の苦勞人^{アイル}だった
りする。

* * * *

しばらく農場でお仕事というか手伝いというか邪魔かわからない
ことをした一行は再び村長の市の下を訪れていた。

「村長、何か依頼^{クエスト}はありましたか？」

「はい。実は 溪流 に “ リオレイア ” が現れまして……」

「「リオレイア!？」」

「冗談でありますよ」

ズルツ、と翔とヤマトは盛大にコケた。

“リオレイア”

通称“雌火竜”と呼ばれる飛竜を代表するモンスターだ。

雄の 空の王者 の異名を持つ“リオレウス”と並び立つ 陸の女王 。突進やプレスを多様する飛竜で、その尻尾には猛毒の針が付いている。大型モンスターに属する典型的な形の飛竜種だ。

「村長、驚かさないで下さいよ」

「そうですニヤ！」

翔とヤマトはまだリオレイアを見たことは無いが、その驚異だけは知っている。

小さな村がリオレイアたった一頭だけで壊滅するのも珍しくは無いのだ。

「うふふ、お二方共いつも新鮮な反応が返って来ます故面白いのですよ」

口元に手を当ててコロコロと笑う。

村長、久御門 市。完全なSである。それも、“ド”が付くぐらいに。

「真剣な話にいたしますと、 溪流 に“アオアシラ”が現れました」

“アオアシラ”は牙獣種に分類される中型モンスターだ。堅い手腕に付いた鋭い爪の一撃は初心者ハンターがまともに喰らえばノックアウトは免れない事実である。

先程説明した“リオレイア”などの脅威よりはずっと楽であるが、

油断ならないモンスターだ。

「生憎ここには翔様しかハンター様がおられません。 溪流 は村にも近いですからいつ被害が出るかもわからないのです」

それに、と市は更に言葉を付け足した。

「何やら 溪流 がいつもより感じが違うという報告も受けています。アオアシラの討伐は無理でも、調査をお願いしたいのですが……」

市の声が少し沈む。彼女の勘が警告音をガンガンに鳴らしていた。

「任して下さいよ村長！ アオアシラなんてちょちょいのちょいで撃退してやりますから！」

「安心するニヤ！ 僕とご主人なら余裕ですニヤ！」

そんな村長の不安を吹き飛ばすように翔とヤマトは胸をドンと叩く。ここは自分達に任せて村長は堂々と村長らしくしていてくれ。無意識にそんな感情を二人（？）から感じた。

彼らなら出来る。心の奥は直感的にそう告げた。

「……それでは、お願いしますがよろしいでしょうか？」

「応！」「承ったニヤ！」と頼もしい返事をする翔とヤマトに市は「よろしく願いいたします」と頭を下げた。

『アオアシラの狩猟』

クエスト内容：アオアシラ一頭の狩猟

報酬金：12000z

契約金：1000z

指定地：溪流

制限期間：2日間

主なモンスター：

- ・ジャギイ
- ・ジャギイノス
- ・ガーグア

クエストLV：

成功条件：

- ・アオアシラ一頭の討伐、捕獲、撃退のいずれか
- ・溪流の調査

失敗条件：

- ・狩猟続行が困難の場合
- ・タイムアップ

依頼主：久御門 市

第1話（著：キヨン）（後書き）

初めましての方は初めまして！

お久しぶり、もしくは、先日ぶりだね、な方、ごきげんよう。

今回第一話を担当させていただいたキヨンです。

この度は『MONSTER HUNTER ～紅嵐絵巻～』をご覧いただきありがとうございます。

サークルを代表してお礼申し上げます。

この作品はリレー小説ということで一人一話を担当し、全員一周で一章を目指します。

長い長い道のりとなりますが、最後まで（あるかどうかわからないけど）おつきあいよろしくお願いします。

さて、次話担当は『Magus Magnus』マクス・マグヌス
『でおなじみの“蒼崎れい”様です。

次回もよろしく願いいたします。

それでは！

サークル総括者“キヨン”

第2話（著：蒼崎れい）

翔はクエストを受注した次の日、オトモのヤマトを伴って、日の出前から狩り場に向けて出発した。

移動はガーグアという走る能力に優れた丸っこい鳥に、車を付けた鳥車と呼称される乗り物である。ユクモ村周辺の地域で広く普及しており、近辺では最もポピュラーな乗り物だ。

そんな鳥車の荷台には、ユクモ装備に身を包んだ翔の姿があった。背中には、昨晚入念に手入れした愛刀　骨刀【犬牙】の姿も見受けられる。

「ヤマト、寝れる内に寝とけよ。アオアシラといつ戦う事になるかわかんねえからな」

「了解ですニヤ」

鳥車の荷台に揺られながら、翔はヤマトに声をかける。

ひとたび現場に足を踏み入れれば、そこはすでに人の世の理が通用しない世界だ。

たった一つだけ存在する絶対のルール　“弱肉強食”に全てを支配された、文字通り死と隣り合わせの空間。一瞬の油断も、命取りになりかねない。

安心して眠れる内に、ありったけ寝ておかなければ。

翔とヤマトを乗せた鳥車は暗闇に彩られた森をかき分け、一路目的地を目指した。

翔とヤマトが目を覚ましたのは、今回の狩猟場である溪流に着いてからだ。鳥車の操縦をしていたアイルーが、起こしてくれたのである。

「ふうう、ここに来るのも久しぶりだぜ」

そう言つて翔が目を向けるのは、広大な自然と清流に囲まれた【溪流】と呼ばれるフィールドだ。

青々と茂ったユクモの木々もさることながら、一番の特徴は透明度の高い清らかな水であらう。

この水は近隣の山に降った雨水が時間をかけてろ過されたもので、【溪流】のあちこちで湧き出では、近くを流れる川へと注いでいる。飲み水としても重宝されており、溪流にこれだけ大量の緑が育まれているのも、ひとえにこの水のおかげと言つても過言ではないだろう。

「久しぶりつて、先週も来たばかりですニヤ」

「あれ、そうだったか？」

「繁殖期【春】の溪流名物、特産タケノコ狩りですニヤ。本当に忘れたのですかニヤ？」

「ああ、さっぱり」

まず翔とヤマトは、ベースキャンプに設置されている青いボックスへと歩み寄った。

このボックスには、現場でハンターの役に立つアイテムが保管されている。管理を行っているのは、ハンターズギルドと呼ばれる組織だ。

ハンターズギルドとは、クエストの発注、モンスターの生態調査、乱獲の防止、危険なモンスター（主に古龍種）の監視などを主にやっている、巨大なハンター支援組織の事である。

全てのハンターはハンターズギルドに登録されており、腕の良いハンターには、ギルドマスターから直々にクエストを依頼される事もあるらしい。

このベースキャンプに貴重な補給物資を届けているのも、彼等ハ

ンターズギルドなのだ。

翔はボックスの中から応急薬や砥石を取り出すと、意気揚々と溪流の奥深くへ消えていった。

村長から受注したクエストは、アオアシラの討伐・捕獲・撃退のいずれか。もう一つが【溪流】の調査だ。

あのドSな村長の話によると、今年の【溪流】はどうやらいつもと様子が異なるらしい。

今回の狩猟対象であるアオアシラは別名“青熊獣”と言い、読ん

で字の如く熊のような出で立ちをしたモンスターである。
最初の繁殖期には冬眠から目が覚め、餌を求めて溪流に多く出没するのであるが、今年はなぜか例年より目撃情報が多く寄せられているのだ。

山中に開墾かいこんされた畑、街道を行き来する行商人達、果ては近隣の村々まで。目撃情報は後を絶たない。

それで今回、ユクモ村の村長である久御門市くみかどいちが、アオアシラへの対処と異変調査のために、翔にクエストを依頼したのだ。

「ヤマト、そっちの様子はどうか？」

「特に変わった様子はないですニヤ」

翔とヤマトは周囲を警戒しつつ、しかし臆する事なく湿った大地を踏みしめる。

一人と一匹が探しているのは、アオアシラの大好物であるハチミツだ。運搬されているハチミツ狙って、街道の荷車を襲う事もあるらしい。

近くで見張っていれば、高確率で発見できるはずである。

と、その矢先、翔はあるものを見つけた。

「おい、ヤマト。ちょっとこっちに来てみるよ」

「なんですかニヤ？ ご主人」

ひよいひよいひよいつとヤマトが駆け寄って来た所で、翔は自分が見つけたものを指指した。

「間違いねえ。アオアシラだ」

「でっかい足跡ですニヤ」

巨大　　と言うほどでもないが、比較的大きな部類に入るだろう。翔とヤマトはその足跡をたどって、更に奥へ　　日の光をほとんど遮るような深い森の中へと入って行った。

奥へ奥へと進むにつれて、足元を覆う雑草が増え始め、ついには足跡も消えてしまう。どこかにアオアシラの痕跡がないか、翔とヤマトは必死に探した。せつかく見つけたのだから、無駄にはしたくない。が、残念ながら周囲にそれらしい痕跡は発見できなかった。

だがその代わりに、芳醇ほうじゅんかつ甘い香りをヤマトがかぎつけたのである。ユクモ農場でもよくかぐ事のできる香りだ。

「ご主人、ハチミツの匂いですニヤ」

「ヤマト、それマジかっ!？」

「マジですニヤ」

きらりーんと、翔にウィンク。

そして指差した先には、倒れた樹の幹に巨大なハチの巣があった。それも、両手で抱えきれないほどの大きさである。

「ナイスだぜヤマト!」

「ふっふっふっ。このヤマトを見くびってもらっちゃ困るのですニヤ。この程度、朝飯前ですニヤよ」

「まあ、どつちかと言うと、もうすぐ昼飯前だけだな」

きゅるるゝ、と翔のお腹が空腹を訴えた。そういえば、【溪流】に着いてからかなりの時間歩き回っている。

到着した時にはすでに真上近くまで日が昇っていたので、そろそろお昼ご飯の時間には違いない。

翔は大きなハチの巣を視界に納めながら、遠く離れた高台へと移動した。

「さてっと、そんじゃまあいっただっきまゝす」

本日の昼食は、コノハとササユお手製の焼き魚弁当だ。ユクモ名物の大浴場に併設された集会所で、受付嬢をやっているあの二人である。

農場で取れたてのサシミウオが丸々一本入っていて、一秒たりとも待ちきれない。

翔は迷う事なく、焼きサシミウオへとかぶりついた。

「んぐんぐ、うめええええっ！」

さすが、取り立てだけあって美味しい。

「ヤマト、お前も食べるって」

「おお、ご主人！！」

と、半分以上身の無くなった焼きサシミウオと、おにぎりを一つやった。

一人と一匹は受付嬢お手製の弁当をあつという間に平らげると、消臭玉で身体の匂いと弁当の匂いをかき消す。

アオアシラの嗅覚は、それだけ鋭敏なのである。もしかしたら、これでも見つかるかもしれないが、まあそこは運に任せるしかない。

「そんじゃヤマト、見張りを頼んだぜ」

「了解ですニャ。このヤマト、ご主人の為に一生懸命頑張るですニャ」

「あと、ペイントボールな。見つけたらこれを当てろよ」

「わかっておりますニャ。ではご主人、気を付けてニャ」

「おおよ」

翔は周囲の地形を入念に読み取りながら、【溪流】の更なる調査に向かうのだった。

「うーん、確かにちよつと変だな」

入り口付近ではわからなかった事が、【溪流】の奥に進につれてだんだんとわかり始めてきた。

小型モンスターの数が少ないのである。

ジャギイやジャギイノス、それにガーグアの数が明らかに少ない。「いや、これは少ないっていうよりも……」

森の浅い方へ移動してんのか？

よくよく思い返してみれば、確かにベースキャンプの近くに小型モンスターが多かったような気もする。

偶然なのか、もしくは村長の言うように、【溪流】になにか異変が起きているのか。

「っ！？」

翔は慌てて、茂みのそばに身を屈めた。先ほど視界になにかが映ったような気がしたのだ。

物音を立てないよう、そつと顔だけを出してみると、

「……あれ、ドスファンゴじゃねえか……！？」

あの特徴的な白い毛と灰茶系の毛。見間違えるはずもない。

今回の狩猟対象であるアオアシラと同じく、牙獣種に属する中型モンスターだ。四足歩行で鋭く尖った牙を持つ特徴の、巨大なイノシシのようなモンスターである。

「村長お、ドスファンゴが出るとか聞いてねえよ」

翔は小さな声で愚痴をこぼしながら、ドスファンゴの動向をうかがう。ドスファンゴ程度なら狩れない事もないのだが、今回の対象はあくまでアオアシラだ。

それに、狩猟許可の出していないモンスターを狩るのはギルドの規約に反するし、なにより無駄な殺生はしない主義だ。あと、翔の今の実力や装備では、ドスファンゴを狩った後にアオアシラと対するるのが難しいのも事実である。

視線を一転に固定したまま、翔は逃げるチャンスを待つ。緊張の

ために防具の裏にびっしょりと汗をかき、体力がガリガリと削られる。

「……ふうう、まだか？」

翔は大きく息を吐き出し、新鮮な空気を肺いっぱいに取り込んだ。発見してからずっと、ドスファンゴに動きはない。こっちに気付いて動かないのか、それとも単に寝ているだけなのか。

ん？

「いや、寝ているにしちゃあ、動きがなさすぎるような……」

翔は目を凝らし、注意深くドスファンゴを見るが、やはり微動だにしない。

緊張で張りつめていた思考はいつの間にか不審感へと置き換わり、翔の足を前へ前へと誘う。

始めは小さかったドスファンゴの姿がどんどん大きくなり、不審感が大きくなる。それと共に、吐き気をもよおす生臭い臭気が鼻孔へとなだれ込んで来た。

「もしかして、こいつ!？」

不審感が更に確信へと転じ、翔はドスファンゴへと駆け寄った。

正確には、そのなれの果てに。

「……………どうなってんだ、こりゃ」

その燦々たる状況に、翔は絶句せざるを得なかった。

予想通り、ドスファンゴはすでに死んでいたのである。それも、事故や老衰ではない。

何者かによつて狩られていたのだ。

「なににやられたんだ？ この辺じゃ、大型モンスターなんてめったにお目にかかれないのに」

ドスファンゴは腹の肉の大部分が喰われており、これが異臭を放っていたのだろう。

それもれ状態から見ても、ほとんど一撃だ。ドスファンゴは背中付近の焼け焦げた部分が大きく陥没している以外は、これといった外傷は見られない。

「焼けてるって事は、火かなんか？」

翔は村長の言っていたリオレイアが、本当にいるんじゃないかと思った。だが、中型モンスターでさえあまり見る機会がないのだ。その線はないだろう。

それにリオレイアほどの大型モンスターがいるならば、絶対に目撃者がいるはずである。なんせ彼女らは、空を飛べるのだから。

翔は気を取り直して、調査を再開する。

他に気になったのは、虫の死骸がドスファンゴの近くに多く落ちている事だ。

見たところ、雷光虫のようにも見えなくはないが、少し違うような気がする。

「まあいいや。とっととヤマトの所に戻るか」

調査とやらも、このドスファンゴのお陰でかなり進んだ。

翔は不審なドスファンゴの死体を見送りながら、その場所を後にした。

だが、翔はたった一つだけ気付かなかった事がある。

雑草に覆われて見えにくくなっていたのもあるが、その近くには鋭角的な形をした大きな足跡がいくつもあったのだ。

翔はその後も、周囲になにか変化がないか確認しながら、ヤマトの待つ小高い茂みの中へと戻った。

「ヤマト、そっちの調子はどうだ」

「ご主人、お帰りですニャ。こちらは見ての通り、まだなのですニャ」

「どうやら、まだアオアシラは現れていないらしい。夜間の狩猟は視界が悪いので、できる事なら明るい内に現れてくれればいいのだが。」

翔とヤマトは時折水分を補給しながら、ただひたすら待つ。待つ時間に比例して、体力と精神力がどんどんすり減っていく。

もう間もなくすれば、真っ白な陽光も赤く染まるだろう。それから時を置かずして日は沈み、夜の闇が地上を支配する。

その前までには、決着をつけたいのだが。

「ヤマトオ」

「なんですかニャ、ご主人」

「まだかなあ……」

「まだですニャア」

それから五分後。

「そろそろかなあ……」

「どうですかニャア」

そのまた五分後。

「ここで待つて大丈夫かなあ……」

「そればかりはわからないですニャア」

更に五分後。

「もう帰らせてえ……」

「ご主人、もう少し待つてみるのですニャ」

元々待つのは得意でない。それも手伝って、全身がうずく。

ズン……………。

できる事なら、今すぐにでも全身を動かしたい気分だ。

ズン……………。

そんな翔の願いが通じたのか、ずっしりと重く、それでいて軽やかな足音かな地響きがする。

いよいよ、待ちに待った狩猟の時間だ。

ズン！

ただし、一人と一匹が思い描いくほど、自然の摂理は優しくできてはいない。

「ヤマト！」

「はいですニヤ！」

翔とヤマトは茂みから跳び出すと、急な斜面を一目散に駆け下りた。

一瞬前まで一人と一匹がいた場所を、青い毛をした獣の重厚な爪がえぐった。

翔とヤマトは急な斜面を駆け下りた所で、武器に手をかけながら背後を振り返った。

翔は骨刀【犬牙】をヤマトはボーンネコピックを構え、たった今まで自分達がいた場所を見上げる。

「ようやつと出やがったなあ。ヤマト、覚悟はいいか？ ドスジャギイみてえにはいかねえぞ」

「覚悟なら、ご主人のオトモアイルーになった日からできてますのニヤ」

大きい。立ち上がれば六メートル半はありそうだ。アオアシラの平均サイズから比べて、大きめである。

「グワアアアアアアアアアアア……！」

アオアシラは大きく一鳴きすると、巨体からは想像もつかない俊敏さで、一気に斜面を下ってきた。

翔は左に、ヤマトは右にそれぞれサイドステップし、アオアシラのタックルをかわす。

攻撃をかわされたアオアシラは、すぐさま翔の方へと振り返った。単純にヤマトより翔の方が、エサとして美味しそうに映った。そ

れだけの事である。

鋭角的なターンを決め翔に向かって飛びかかると、太くたくましい前足を一直線に振り下ろした。

「このっ！！」

翔は臆する事なく、斜め前方へと走り出す。重厚な爪が地面に突き刺さった音を背に、すれ違いながら骨刀を走らせた。

「ちっ」

だが、アオアシラにほとんどダメージはない。斬れ味が足りないのである。表層の毛を少し斬っただけだ。

しかし、はなから一撃で仕留められるとも思っていない。

「ヤマトオー！！」

翔はヤマトの元に駆け寄りながら、合図を出した。

「はいですニャー！！」

ヤマトが取り出したのは、ペイントボールだ。

桃色をしたボールはヤマトの手から放たれると、無防備に背中を向けたままのアオアシラの下半身を直撃した。

ボールからは蛍光色の粉末が飛び出し、アオアシラの毛に貼り付く。それでも貼り付かなかった粉は、空気に乗ってゆらりと宙を舞った。

これで少しの間は、例え逃げられたとしても追跡が可能である。

「グガアアアアー！！」

アオアシラは再び身をひるがえすと、後ろ足で立ち上がった。

やはり大きい。太刀を振り上げても、頭まで届くかどうかというサイズだ。

だが、翔もヤマトも怯える事なく、アオアシラへ向かって走り出した。相手の一挙手一投足に、全神経を集中させる。

前足を頭上近くまで振り上げ、袈裟斬りに何度も振り下ろす。雑な上にずいぶんと直線的な軌道だ。

しかし、一発でもかすれば命の保証はない。

翔とヤマトは、そんな一撃必殺のブローを全てかわしながら、再

び背後に回り込み右の後ろ足に斬りかかった。

ここは刃が最も通りやすい場所でもあり、同時にあの重量を支える大事な部分でもある。

だがやはり、

「こいつうっ!？」

「ニヤニヤッ!！」

一筋縄にはいかない。

翔の骨刀は表層の毛を多少斬り落とした程度、ヤマトのボーンネコピックも分厚い毛の層に阻まれてしまう。

「伏せる!」

叫びながら、翔はヤマトを抱いて伏せた。

と、数瞬もしない内に、アオアシラの右前足ブローが頭上を通り過ぎる。

翔はまだ前足が振り抜かれている最中に、反対方向へ素早く転がって難を逃れた。

「くそっ、ユクモノカサが!？」

先ほどの一撃で、ユクモノカサのカサの部分が削り取られてしまった。

帰ったらどうにかしないとなあ。直せるかな？

とかなんとか思っていると、さっきまで前足を振り回していたアオアシラは、すでに前傾姿勢でこちらを睨みつけている。

「ガウアアア!！」

右前足を振り上げながら、飛びかかってきた。

翔は体勢を立て直すと左側へサイドステップしながら、突きだして来た前足へと刃を走らせる。

ガガガガと、まるで岩でも斬っているような感触が走った。

「ちきしょう、かてえ!」

攻撃で削れた腕甲が飛び散り、顔や腕にちりつと痛みが走る。

腕甲を斬った衝撃で、腕が痺れる。

だが、問題はない。

「このヤマト、忘れてもらっては困るのニヤツ！」

そこへ、翔の後ろからたつぷりと助走をつけたヤマトが、大きくジャンプした。

ヤマトはそのまま綺麗な放物線を描きながら、振り返ったアオアシラの顔面へと着地する。

「ご主人！ 今ですつ！ ニヤツ！」

視界を奪われたアオアシラは、ヤマトを振り払おうと立ち上がってぶんぶんと首を振った。

それでも払えぬとわかると、今度は前足を頭へやるが、ヤマトもこれを必死でかわす。

「ナイスだヤマト！ もうちょっとだけ頼むぜ」

「任せるっ、のニヤアツ！」

翔は骨刀を地面と平行になるように構え、突きの体勢に入る。

斬れないのなら、突けばいい。

線でなく点で攻撃する突きなら、いくら毛が厚かろうと固かろうと、問題ない。

「はあああああああ！！！」

翔は脇の下に骨刀を構えたまま、勢いよく走り出す。

攻撃するのは後ろ足。ヤマトのおかげで背中を向けている今がチャンスだ。

「これでも喰らえ！」

ざくつと、骨刀の先端がアオアシラの左後ろ足に突き刺さった。

ほんの少しではあるが、確かな手応えである。

と、その瞬間、アオアシラの動きが変わった。

「グワアアアアアアアアアア……！！！」

今までの、翔達を威嚇していたものと違う、どこか悲痛なものが入り交じった咆哮。翔の突きが効いた証拠だ。

だが、ダメージを与えた事で生じた一瞬の油断が命取りだった。自らを傷付けた者を薙ぎ払わんと、乱暴に振るわれた前足。その一撃に対して、ほんの少しだけ反応が遅れてしまった。

「やべっ!？」

骨刀を引き抜き、上体を反らしながら大きくバックステップする。
「っ痛う!!」

だが、重厚な爪が翔の右肩を捉えた。

幸い一ミリほど表面が裂けただけである。ただ範囲が少し広い分、派手に血しぶきが飛び散った。

「グラアアアアアア！」

血の臭いに興奮したのか、それとも手傷を負わされた事に対する恨みか、ヤマトを振り払ったアオアシラは、一直線に翔へと突進してきた。

だが足のダメージのためか、先ほどより動きは遅い。

「ご主人には手を出させないニヤアッ！」

振り払われたヤマトは、しかしあきらめる事なくアオアシラへと向かっていく。

ボーンネコピックを反対に持つと、先ほど翔が突き刺した場所へ柄を突き込んだ。

「ガウッ!？」

分厚い脂肪の層に阻まれはしたものの、アオアシラは痛みに悲鳴を上げ、地面に激突する。

「ヤマト、一旦退くぞ！」

「はいですニヤ！」

肩の傷も早く止血しなければ。翔は煙玉を取り出すと、地面に投げつける。

青から赤に変わり始めた空の下、白い煙が【溪流】から立ち上った。

第2話（著：蒼崎れい）（後書き）

おそらく、ここで会うお方は全員初めてだと思います、蒼崎れいです。

というはけで、紅嵐絵巻の第二話を担当させていただきました。本格的な二次創作は初めてで、けっこう緊張してます。モットーは原作の世界観を大切にです。

モンハンを文章で書くのって、けっこう大変ですね。あと、地の文がいっぱい。まあ、どれだけ筆舌を尽くしても、あの映像美を表現するのは難しいんですが。

まあ、そんなわけで今後ともよろしくお願いします。

次話は主にノクターンで活動していらっしゃるハセガワハルカ先生です。でわ、次回担当の回でまたお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0796w/>

MONSTER HUNTER ~ 紅嵐絵巻 ~

2011年11月12日08時26分発行